

各関係機関長様

熊本県病虫害防除所長

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒状況（技術情報第 1 号）について  
（送付）

このことについて、下記のとおり取りまとめましたので、業務の参考に御活用ください。

## 記

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、本年は平年より低く、年々低くなっている。

### 1 調査概要

- （1） 本年 5 月下旬に、麦主産地の県内 3 地点（玉名市、嘉島町、氷川町）の小麦ほ場から採集したヒメトビウンカ（成虫及び幼虫）について、イネ縞葉枯ウイルスの保毒状況を、簡易 ELISA 法を用いて調査した（H26 以前は高比重ラテックス凝集反応法にて実施）。
- （2） 保毒虫率は、県平均で 2.3%（平年 4.3%）で平年よりやや低く、推移の傾向としては全体としては年々低くなっている（表 1、表 2、図 1）。

### 2 今後の留意点

- （1） 麦類のほ場は、ヒメトビウンカ第一世代の増殖場所である。麦類の栽培面積が広い地域では、本種の密度が高まりやすいので、保毒虫率の高い地点ではイネ縞葉枯病の発生に注意する。
- （2） イネ縞葉枯病の発生を防ぐためには、病原ウイルス（イネ縞葉枯ウイルス）を媒介するヒメトビウンカの防除が重要である。
- （3） イネ縞葉枯病は、感染時期が早いほど被害が大きいため、箱施薬剤によるヒメトビウンカの防除が有効である。トビイロウンカ対象にピメトロジン粒剤を施用した場合はヒメトビウンカにも効果が認められるが、フィプロニル粒剤の場合は効果が低い。（平成 23 年 5 月農業研究成果情報 No. 494「主食用水稻での 4 種害虫に対する箱施薬剤の防除効果」[http://www.pref.kumamoto.jp/ki\\_ji\\_1033.html](http://www.pref.kumamoto.jp/ki_ji_1033.html)）
- （4） 最高分けつ期に感染すると不稔となり収量が低下するので、本田での発病やヒメトビウンカの発生が多い場合は防除を行う。なお、県内では、各種薬剤に抵抗性を獲得したヒメトビウンカの発生が確認されているので、薬剤の選定に注意する。（平成 27 年 3 月 4 日付技術情報第 17 号 [http://www.jpjn.ne.jp/kumamoto/H26/yosatu/150304gi\\_jyutu.pdf](http://www.jpjn.ne.jp/kumamoto/H26/yosatu/150304gi_jyutu.pdf)）
- （5） 発病株を認めた場合は、伝染源になるのでできるだけ早めに抜き取る。
- （6） 多収米（飼料用米等の多収性品種）の中には、イネ縞葉枯病に対して罹病性の品種（モミロマン、ミズホチカラ等）もあるので、栽培する品種に応じた防除を行う。（飼料用米の多収性専用品種に取り組むに当たって－多収性専用品種の栽培マニュアル－【農林水産省、平成 27 年 4 月改定版】）（[http://www.maff.go.jp/j/seisan/kokumotu/pdf/siryuum\\_2704.pdf](http://www.maff.go.jp/j/seisan/kokumotu/pdf/siryuum_2704.pdf)）

表1 ヒメトビウンカ保毒虫検定結果(平成27年5月)

No.	地点名	検定数 (頭)	保毒虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
1	玉名市岱明町野口	190	8	4.2
2	嘉島町下六嘉	190	3	1.6
3	氷川町若洲	190	2	1.1
合 計		570	13	<b>2.3</b>
昨年度(18地点の平均値、検定数各地点96頭)				<b>3.8</b>
平年度(過去10年の平均)				<b>4.3</b>

※本年は簡易ELISA法、昨年度及び平年度は高比重ラテックス凝集反応法による検定

表2 各地域での保毒虫率の推移

単位: %

調査年 地域	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	平 年 (H17~ H26)
全 域 (検定地点数)	2.9 (6)	5.9 (10)	5.4 (6)	4.6 (19)	4.8 (23)	5.4 (15)	3.9 (13)	4.2 (17)	1.6 (18)	3.8 (18)	2.3 (3)	<b>4.3</b>

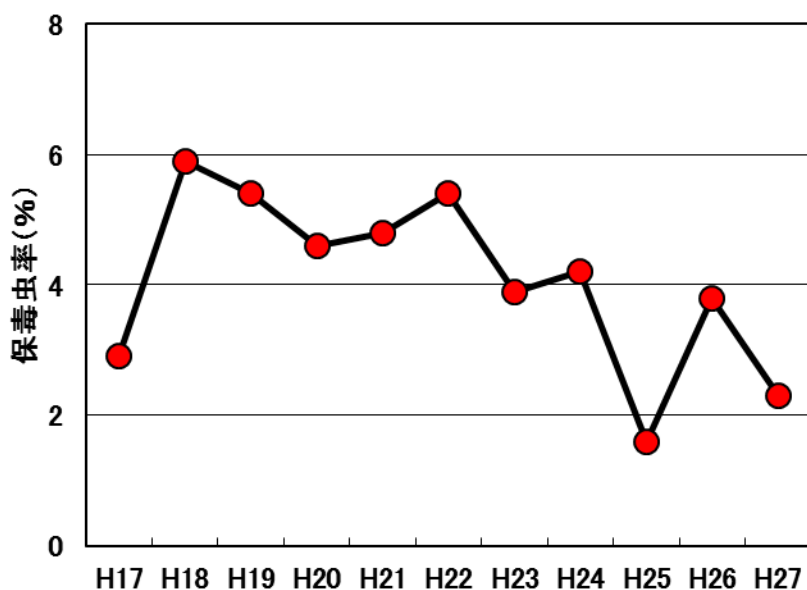


図1 イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

熊本県病害虫防除所  
 (熊本県農業研究センター 生産環境研究所  
 病害虫研究室 予察指導係)  
 担当: 山口 TEL 096-248-6490